



春明の子どもたち（4号）

2025.11 副園長 榎本トミ

猛暑が追いかけてきそうな気配をかんじながらの毎日でしたが、富士山や、北の山での初冠雪の便りも届き、「秋はどこに行ったの？」と思うほど急に寒くなってまいりました。寒暖の差が激しい分、今年の紅葉は一段とどこも綺麗だといえます。

猛暑続きで子どもたちの散歩もなかなか出かけられなかった夏でしたが、最近はやうやく公園へのお出かけが増えました。今では、子どもたちにとって“宝物と出会える嬉しい散歩”になっています。うっすらと額に汗をにじませながらも大喜びで、どんぐりやきれいな落ち葉拾いに夢中です。子どもたちは、自分の驚きや喜びを感じた時、決まって言う言葉があります！「おかあさんにもおみやげにあげるんだあ〜！」と。自分の嬉しさや驚きを同じ思いになるに決まっている（家族と分かち合いたい！）と思うのです。保育園に戻ってからは名前の知らない虫や植物を図鑑で調べたりしながら、分からないことを理解しようと一生懸命になります。分からないことを知ろうとするその姿は、まさに“感じて、考える”という学びの原点です。

自然の中から、季節の中から、絵本の中から、お話の中から子どもたちは素朴な感動をたくさん受け止めます。考えることよりも先に「感じる！」ことをたくさん経験させてあげたいと思います。

このいい季節に子どもたちに目から見えたこと、耳から聞こえてくること、このような経験をたくさんさせてあげたいなあと思います。こうした子どもたちの目から見えたこと、耳から聞こえたことの素朴な感動は、子どもの「こころ」にすべりこみ、そこで長い間じっとしているうちに、子どもと一緒に成長していくような性質のようなもので、言葉として教えたり、その場で理解させたりできるものではありません。

＝「心が今日感じとったことを頭が明日理解する」＝

子どもの生活の中でも、考えることよりさきに感じる事が十分にされなければならない時代だと思います。

※子どもの時代（絵本の時代）は、心を育てる時代です。乳幼児の時代は、絵でものを考える時代です！

このいい季節に子どもたちに絵本をたくさん読んであげてください。読み終わった時には同じ気持ちでぐっすり眠れるような気がいたします。子どもたちに読んであげながら、一緒にすごした「時」が子どもたちの成長と共に大きくなった時にどのように思いだされるのか？また、子どもたちの「脳」にどのようにきざまれていくのか、科学的に分かることはできないのだろうか？と思っている時にステキな記事を見つけましたの

で、ご紹介いたします。

新型コロナの感染拡大によってもたらされたもの。

新型コロナの感染拡大により、娘が通う学校も休校となった。親子が家の中に閉じこもる時間が一日の大半を占め、互いにストレスをぶつけ合うことが目立って多くなった。重苦しい空気をかえなければ、と娘を散歩に誘った。彼女とこれほど長い時間、並んでおしゃべりするのは何年振りだろう。保育園の送り迎えの時以来ではないだろうか。

散歩の途中、本屋の前で娘が突然立ち止まった。「あ、『ごんぎつね』！『モチモチの木』もある。なつかしいな。小さい時よく読んだよ」。絵本フェアの広告を指さしながら、それぞれの本のストーリーをすらすらと語りだした。よく覚えているものだと感心していた時、「お母さん、覚えてる？」と娘がきいてきた。次のページに進むことが怖くなったら、私にページをめくってもらった。悲しい場面が迫ってくると、私の膝の上にとった。これらの本には、こうした私との記憶が残っているという。そんなことまで覚えているのか、とおどろいた。

子どもへの本の読み聞かせが大事だと言われる。想像力や言語能力を高める、感情を豊に発達させるといっ

た効果が期待されているらしい。しかし大切なのは、読み聞かせる行為そのものよりも、むしろ、子どもと身体でつながり感情を直接共有しあう経験を、本を介して得ることなのかもしれない。子どもは、身体の内側から湧き立つ思いを躊躇なく外の世界へと表現する。そして親をはじめとする周囲は、それを寛容に受けとめている。こうした経験は、大人となった今ではなかなか得られない。幼少期の特権だ。幼少期の記憶を思い出すとなつかしく感じられるのは、誰かに感情をまるごと受け止められ、共有された時に身体内部に湧き立った心地よい経験が、私たちの脳内にしっかりと刻み込まれているからである。

今では、スマートフォンやAI搭載モニターなどをつかって、忙しい親に代わって子どもに本を読み聞かせるサービスを簡単に利用できる。しかし、こうした経験は子どもたちの身体内部に心地よさを湧き立たせるものの、それが記憶として残るという点では十分でないことを理解しておきたい。また、子どもだけでなく、読み聞かせる大人の側にも、心地よい感覚がもたらされていることも重要だ。コロナ禍の今、社会には他者との身体接触を避けようという空気がみちている。一刻も早くこの問題が終息し、子どもたちが思う存分、他者と身体を介しながら感情を共有できる日常が戻ってほしい。

本屋の広告をひとしきり見終わりに、再び歩きだした時、娘がぎゅっと私の手をにぎってきた。小さかった手が、いつの間にか私のほうが彼女の手握られるようになった。人間はこうして他者の身体を感じながら、連綿と命を繋いで生きてきたのだろう」

【2020年10月 コロナ禍に思う 書物逍遙 明和政子…「究」No. 115, ミネルヴァ書房】



涼しくなって、寝る前に子どもを抱っこして絵本を読んであげてください。大好きなお母さんやお父さんに抱っこされながら優しい声とお互いの体温を感じながら、同じ絵本を観て同じ思いになりながら「時」を過ごす！この様な時を重ねながら子どもたちの（乳幼児の）脳は成熟していくのだといいます。

今まで、子どもたちの「脳」がどのようにして「成熟」していくのか私には科学的につかめていませんでした。ここにきて、初めて「子どもの脳は、大人のミニチュア版、小型版ではない！」ということが分かりました。

お父さんやお母さんの膝のうえで絵本を読んでもらいながら、子どもたちが、ありのままの自分らしさや、驚きを表現して、目をまん丸にしたり、怖さで絵本から目を背けたり、嬉しくなって抱きついてきたり！このような当たり前を大人に寛容に受け止めてもらいながら絵本を通して子どもたちと気持ちを共有していきます。乳幼児期だから子どもたちも絵本の中でのその驚きを躊躇なく表現してきます（乳幼児だからこその特権なのですね！）。こうして、受け止めてもらえたからこそ、子どもたちの脳裏にその喜びがしっかりと刻み込まれていたから、思い出すこともできるのだと改めて思いました。子どものありのままの姿を受け止め、一緒に驚いたり、喜んだりしながら、抱っこしてもらっているお父さん、お母さんの身体を介しながら守られているという思い（感じていること）が子どもたちの「脳」に刻み込まれていくことで子どもたちの脳が成熟していくのだと分かりました。同じように感じて、子どもたちと共有することが子どもたちにとってはとても重要なことであり、子どもたち（乳幼児期）の「脳」を成熟させ、それに伴い、「こころ」を育てているのだということが脳科学的に分かっています。

とが脳科学的に分かっています。

このようなことから秋の涼しくなった夜の寝る前に子どもたちにお父さんやお母さんの声でお話や絵本を読んであげることで子どもたちと楽しい時間を過ごしていただきたいと思います。絵本やお話が終わった時に「おやすみ」が言えたらきっと子どもたちにとっては最高の一日を終えて、また、明日が楽しみになる時となるのではないのでしょうか？今の時期でしか育たない大切なものにどうぞ時間をかけて楽しんでいただきたいと思います。

